

VOL.
120
2023
Spring

市民活動情報誌

Collaboration Paper
for Voluntary Network in Ohmi



「特集」
「地域をつくる。」って
なんだろうⅢ

「草津おみやげラボ」代表
大塚 佐緒里さん
コード・フォー・草津
(Code for kusatsu)副代表
奥村 美佳さん
草津市子ども未来部副部長(幼児担当)兼
幼児課 参事
前田 典子さん

▶ご紹介はP2

Contents

[特集] 「地域をつくる。」ってなんだろうⅢ	P2~4
人と地域とつながる事業所さん	P5
VIVA! BIWAKO	P5
市民活動レポート	P6~7
未来塾16期生の虫の目・鳥の目・魚の目	P7
応援インフォメーション	P8



Ohmi Network Center

淡海ネットワークセンター

公益財団法人 淡海文化振興財団

<https://ohmi-net.com/>



特集

未来に-向かって-つなげる-つづける

「地域をつくる。」ってなんだろう。Ⅲ

「地域をつくる。」ってなんだろう。今号は湖南地区、草津市にスポットをあてました。

草津では「デジタル」を活用して活動が広がっているようです。『チャレンジ!! オープンガバナンス』という、自治体と市民、学生が協力し、データに基づいて地域課題の解決に取り組むアイデアを競うコンテストに草津市が挑戦されており、地域づくりにICTを取り入れ活動する団体さんも。そこで、『デジタル』を共通項に3名の方、それぞれの立場からお話を伺い、デジタルを活用して「地域をつくる」を探ってみました。

最初にご紹介するのは、「草津おみやげラボ」さんです。団体の活動のひとつ『地域再発見アクティビティ』は、デジタルを活用することで、従来の視点を変えた新しい活動を展開中。代表の大塚佐緒里さんにお話を伺いました。

「草津おみやげラボ」代表
大塚佐緒里さんインタビュー

目的は、新しいものをうみだすのではなく…

●『地域再発見アクティビティ』では、デジタル活用されていますが。

大塚さん 活動を「知ってもらう」「広める」には、ウェブが一番だと思うのですが、なかなかハードルが高い。そこで「デジタルを使って地域を盛り上げよう」というコンセプトにすれば参加しやすく、デジタルに強い人からも協力を得やすいと思いました。結果、仲間づくりができますしね。

今あるもの（地域）に注目し、既存のサービス（ウェブ）を使い、それをどう活用すれば地域が盛り上がるかを考え、自分たちのオリジナルの地図、「くさつお宝マップ」を考えました。

●「くさつお宝マップ」とは、どんなwebアプリですか。

大塚さん 地図のベースは「オープンストリートマップ（以下、OSM）」を使っています。OSMは誰でも自由に使えるよう、みんなでオープンデータの地理情報をくるプロジェクトです。それを使用した技術協力を得て作ったアプリですが、地域の大学生・大人サポーターと一緒にデータを整備し、子ども達がスマホから地域の安全な情報を自ら入手し、自ら発信する練習の場に挑戦しています。



水生植物公園みずの森にて公園長から得た知識・自分が感じたことをマップに記し、今後なぞときにも活用します。



ロクハ公園の自然でクイズも作った。四季折々の情報を入力して発信

子供たちがデジタルを使うということ

- 子どもたちのデジタル活用についていかがですか。

大塚さん 今の子どもたちは学校でデジタルを使っていますが、「広める」ということは学校ではありません。でも、この「広める」ことがデジタルならではですよね。すぐに自分たちの成果を広められ、たくさんの人に知つてもらえる。しかし、親にすれば子どもが簡単にインターネットを使うことには、少し抵抗がある。ですから、「地域づくり」に活用するためとお伝えし、インターネットを使うにはルールがあることをワークショップで学んでもらいます。

体験とウェブ。そして地域への愛着へ

- 誰もが気持ちよく使えるウェブ発信、これを学ぶことは安心ですね。地域づくりの視点からはいかがですか。

大塚さん 実際に草津市内の公共施設などで、ワークショップをはじめ様々な体験を通して、楽しみながら学び、発見したもの、気づいたことをマップに入力していきます。そうすることで、新たな人や世代を超えたつながり、まちの歴史や伝統にふれること、また、点在していたものを地図上でつなげてみると、新たなまちの発見はもちろん、課題も見つかるなど地域づくりに活用できていると思います。

- 実際の体験とウェブ上と。これを上手く取り入れた活動ですね。

大塚さん 今の子どもたちは、生まれたときからスマートフォンがあり、学校ではひとり一台のタブレットを使っていますから、すぐに覚えますよ。

と、笑う大塚さん。

大塚さん ウェブを使うことで、まちの新たな発見ができ、なにより発信する側になることで、得られる正しい情報収集や、データの活用についての学びは、これから時代にとっても大切で、かつ自分の地域に一層の愛着を持つことができるのではと期待しています。

デジタルを活用し、地域をつくる。次にご紹介するのは、デジタル活用のきっかけづくりをはじめ、ITを活用して地域づくりを目指す「コード・フォー・草津」の発起人でもある奥村美佳さんです。

**コード・フォー・草津（Code for kusatsu）副代表
奥村美佳さん インタビュー**

自分が橋渡しになれたら…

- 草津市でデジタルを活用したお仕事に携われたそうですね。

奥村さん 草津市役所で子育て支援の仕事をするなかで、子育て情報をウェブサイトで発信する事業を担当することになりました。パソコンで事務をする程度のデジタルスキルしかありませんでしたが、私自身も草津市で子育てをする中で、いかに子育て情報に辿り着くかの重要性を感じていたので、自分が行政とお母さんの橋渡しになれるかなと思いました。

行政では子育てにたくさんの部署がかかわっています。それは有難いと思う一方、情報もそれぞれに分かれていますが、それを一本化されませんでした。そこを解消したいと思い、その後、草津市版子育て情報アプリの構築にも携わりました。

行政と市民の橋渡しをする経験を経て、奥村さんはデータを扱いやすく整理し、公開することで地域の課題を解決できることを知りました。また、地域の困りごとをICTを活用し解決したいと、「Code for Kusatsu（コード・フォー・草津）」を立ち上げ、草津市のゴミ収集が一目でわかるアプリの作成や、ICTを使ったまち歩きのイベントなどを開催。デジタルを地域づくりに活用します。



Code for Japan summitで全国で活躍する仲間と交流

もっと素敵な草津に。そのためには

- そんな奥村さんは、いつも「草津がもっと素敵になればいいな。」と、言います。素敵なお土産のまちづくりにデジタル活用は欠かせないか、聞いてみました。

奥村さん 私はエンジニアでもないし、「デジタル化」を広めたいわけでもありません。デジタル・アナログどちらかではなく、その人に合ったものを選んでもらうきっかけづくりをしたいと思っています。

Profile

インタビュー：大塚佐緒里さん

「草津おみやげラボ」代表

地域のヒト・モノ・コトを出会わせる「宿場町」のような「場」を提供し、ずっと住みたい、帰ってきたいという地域への愛着を抽象した「草津おみやげ」を生み出すことをベースに活動中。

<http://kusatsuomiyagelabo.com/>



私自身はデジタルを活用する機会が多く、これは便利だな、わかりやすいな、という経験をしてきました。これはひとつの「生活の質をあげる」という事だと思います。ツールのひとつとして、デジタルを行政や地域、もちろん個人の生活に活用していくには、その先に「素敵な草津」ができるいくのではないか。

と、笑う奥村さん。デジタル活用は「生活の質をあげる」ひとつのツール。印象的な言葉です。

Profile

インタビュー：奥村美佳（おくみか）さん

コード・フォー・草津（Code for kusatsu）副代表

草津市役所非正規雇用職員として約11年、子育て支援業務に携わる。

「笑いは最高のヒーラー！」をモットーにデジタルツールの講師などを含め、幅広く活躍中。

<https://codeforkusatsu.org/>

最後にご紹介するのは、草津市子ども未来部・副部長の前田典子さん。保育の現場で長く経験を積まれ、行政に異動され今に至ります。異動当時はExcelを使うにも四苦八苦された前田さんは、前述の奥村美佳さんと2018年に「チャレンジ!!オープンガバナンス」に出場されました。行政と市民のタッグ、デジタル活用と、体験を踏まめてのお話です。

草津市子ども未来部副部長（幼児担当）兼
幼児課 参事

前田典子さん インタビュー

行政と市民とがチームに、そこで見つけたものは

● 「チャレンジ!!オープンガバナンス（以下、COG）」は、行政から出場を決めるそうですね。

前田さん そうなんです。保育の世界に限らないと思いますが、現場はもちろん行政にもたくさんの課題があって、私たち自身かなり行き詰った状態でした。その課題のひとつ「保育士不足」について、新しいアイデアがないかと手

をあげたところ、潜在保育士と現場を結びつけるマッチングアプリを開発するアイデアを奥村さんたちから提案いただき、チームとして出場しました。アイデアはもちろん、皆さんが様々な情報ツールを使い、システムを構築していく姿は本当に驚きました。



保育の世界から豊かな草津を
(幼児期の運動遊びシンポジウムにて)

● COGを経験されていかがでしたか。

前田さん 実際のアプリ開発までには至らなかったのですが、コンテストでは「総合賞」を受賞。一緒に登壇した市民の皆さんパワー、特化した技術力の高さを改めて実感しました。この経験で、行政の困りごとは、実は市民の困りごとだと気がつきました。「自分たちで解決せねばならない」と思い込んでいましたが、お互いに課題を共有し、解決に取り組めばいいと学びました。それには、市としてのオープンな姿勢が必要だと思います。市が蓄積しているデータは草津市全体の財産であり、オープンに市民と共有しながら、市民が自分ごととして、市の課題や今後の公共政策にかかわっていくことが必要であり、自分たちも市の運営にかかわっている、と実感いただくことが大事だと思います。最終的に地域・草津がよくなることですからね。



チャレンジ!!オープンガバナンスで
発表された様子(東京大学にて)

豊かな、よりよい草津のために

● COGの経験からデジタル活用の必要性と、何より「草津の子どものために」を願う前田さん。その願いとデジタル活用について、どうお考えですか。

前田さん 保育の世界は、経験と勘で動くことが多い、これも大事なことです。しかしこれからの時代は、日々の保育という営みの中で積み上げてきたものをデータ化し、分析して可視化するという視点が重要であり、それが裏付けられた根拠として保育現場の「質の向上」に活かされていくことが大切だと思っています。今、草津市でも保育施設におけるICT化が進んでいます、これら新しい考え方を今後の課題解決のひとつにしたいですね。いずれにしても「子どもを育てる」ということは、「草津の未来をつくる」ということです。これはすなわち、まちづくりにつながっていて、根幹です。効果的にデジタル、データを活用し、市民の皆さんとともに豊かな未来の草津を、保育からもつくっていきたいと思います。

Profile

インタビュー：前田典子さん

草津市子ども未来部副部長（幼児担当）兼 幼児課 参事

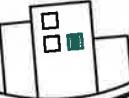
保育現場での経験を活かし、子どもたちの豊かな未来を考え公務を行う。

「デジタル活用」から見えてくる「地域づくり」、いかがでしたか。

新たな発見と、新しい解決の糸口。そして活動の幅を広げてくれそうな「デジタル」ツール。スマートフォンはもう手にあります。一步、踏み出してみましょうか？

地域で社会貢献

人と地域とつながる 事業所さん



CONNECT

「CONNECT(コネクト)」

「滋賀が好き。」それがベースです。

今回ご紹介するCONNECT（コネクト）さんは、大津市にあるアウトドア用品のセレクトショップです。店主である西村裕太さんは生まれも育ちも大津市で、独立するときは滋賀と決め6年前にCONNECTをオープンされました。滋賀にこだわったのは、「滋賀の自然が好きで、地域に根ざしたお店にしたかった。」との思いから。今では県内はもちろん、遠方にもたくさんのファンを持つお店です。

そんな西村さんは、自分の生まれ育った滋賀の魅力を伝えたい。遊び場である琵琶湖や近くの山々をもっと身近に、そして大切に守っていきたい。と、オープン当初からその想いを持っておられましたが、当時は同じような志を持つ人は周りにいなかったそうです。それでも「滋賀の良さに気づいて欲しい」と発信を続け、「ゴミ拾いはアウトドア！」をコンセプトにした、琵琶湖周辺のゴミ拾い『琵琶湖クリーニングクラブ』の活動をスタートさせます。

「たった一人でもやろうと始めた。」というこの『琵琶湖クリーニングクラブ』。決まったルールもなく、開催も不定期ですが、昨年の秋までに15回と数を重ね、参加者は若い人たちを中心に家族連れなど様々。何よりゴミ拾いを「楽しんでいる」のがとても印象的です。

「人に言われて来てないからでしょうね。」と、笑う西村さ

んは「美しい琵琶湖を目の前にするだけで絶対守りたいと思いますから。」と続け、その言葉に活動を続けてきた自信と、変わらぬ琵琶湖への熱い想いが伝わります。

西村さんの想いが大きな輪に広がりつつある今、現在の滋賀の姿を聞いてみると「県内にプレーヤーが増えましたね。滋賀がいい所だと自信を持っている。」と、嬉しそうな西村さん。「琵琶湖は彼らに任せて、次は山の保全について発信や活動ができればと思っています。」とのこと。「滋賀が好きで、周りの自然環境を守りたいだけなんです。」という、滋賀愛に溢れた店主とお店、CONNECTさん。新たな発信、活動が楽しみですね。



琵琶湖クリーニングクラブの活動の様子

- オープン／2016年
- 店主／西村裕太
- 現在地／滋賀県大津市真野二丁目7-1 エスカルゴビル3F
- <https://www.toolshop-connect.com/>

VIVA! BIWAKO びわ湖を味わう! “湖魚料理”的新たな楽しみ方 鯉と野菜のしっとりグリル

鯉



沖島の漁師さんが沖曳きといった漁法で、ワカサギやスジエビなどを獲りにいかれた時、冬越えの為に沖合まで移動をしていた大きな鯉と一緒に網に入る事が時々あります。地元では大きな鯉は筒切りにして煮付けにしたり、薄切りの刺身で楽しめます。

材料(2人分)

- ・琵琶湖の鯉の切り身…150gを2切れ
- マリネ液
 - ・オリーブオイル ……100cc
 - ・塩 ………………6g
 - ・ドライローズマリー ……小さじ1/2
 - ・ドライオレガノ ……小さじ1
 - ・カレーパウダー ……小さじ1
- ・ミニトマト ……6個
- ・玉ねぎ ……1/2
- ・バクチー ……少々
- ・ブラックペッパー ……少々

作り方

- ①鯉の切り身の水分を拭き取り、ジップロックに入れ、そこへオリーブオイル、塩、ドライローズマリー、ドライオレガノ、カレーパウダーを加えて混ざるように揉み込んで2時間程置きます。
- ②オープンの天板にクッキングシートを敷いて、そこ取り出した鯉の切り身と、玉ねぎやトマトなどお好みの野菜を彩に並べて200°Cで30分程しっとりと焼き上げます。
- ③お皿に並べたら仕上げにブラックペッパー、バクチーなどを散らせて完成です。

子ども・教育

遊びをとおして 生きた知恵をつなぐ



私たち「こどもミュージアムをつくる会」は、「楽しく遊んで生きる知恵を」をテーマに子ども達に楽しんでもらう活動を企画し、実施しています

ウッディバル余呉に「余呉こどもミュージアム」を開設しています。私たちが作ったおもちゃや厳選した世界のいろいろなおもちゃで子どもたちに遊んでもらっています。毎月第2土日には、私たちがスタッフとして、子ども達と一緒にイベント等、楽しいひとときを過ごしています。

また、石山商店街振興組合の方々と協力して「こどもミュージアム商店街」や大津市の色々な団体の方々と「みんなのまちおおつ」というイベントを企画し、運営しています。

コロナ禍で、ここ数年実施できなかつたのが残念でした。昨年11月に「子どもミュージアム商店街」を実施しました。子どもたちの笑顔が、とても素敵でした。コロナも落ち着いてきたので、また新たな活動に取り組んでいきたいと思っています。



自然豊かな長浜市余呉町で秋遊びイベント。新米を炊いたり紅葉を五感で体験しました

積み木あそびのびっくり奥深さ講座。積み木の原点はレンガの建築学?!



【寄稿】町田弘法さん

2022年度笑顔あふれるコーブレット基金採択団体

子どもミュージアムをつくる会

●代表／町田弘法 ●設立／1995年
●http://www2.famille.ne.jp/~kobo/

Challenge



未来塾16期生の

虫の目・鳥の目・魚の目

地域の課題を発見し、解決の方策や活動を実践する「地域プロデューサー」が育つことを目指す「おうみ未来塾」。2022年度おうみ未来塾16期生の活動をグループごとにご紹介してきました。

最終回、第3回目は「ダニーさんの秘密の湖部屋」です。

シガリアンを増殖して、もっと魅力的な滋賀を!



「湖底すっきりシガリアン」、「動画ひかえめシガリアン」の増殖。私たちの活動内容です。

…“シガリアン”ってなんや？と思われるかもしれません。ざっくり説明すると、「滋賀が好きな人・団体」。

県内各地に存在する沢山の地域課題を解決し、滋賀をもっと魅力的に、そしてその魅力を皆に知ってほしい。しかし、地域課題の全てをそこに住む人たちだけで解決するのは難しい。それなら、その課題を解決したい！というシガリアンと地域が巡り合い、ともに活動できる体制があれば良いと考え、シガリアンの増殖に取り組んできました。

特に注力して取り組んだのは「湖底すっきりシガリアン」の増殖。びわ湖の湖底には、実は多くのゴミが堆積しています。漁業関係者、魚たち、県民にとって悪影響です。そんなゴミを取り除くために、わざわざ名古屋からびわ湖へ駆けつけてくださるダイバーさん達がいることを知った私たちは、ダイバーさんの活動支援のため、そしてびわ湖をきれいにするため、SNSでの情報の発信、清掃活動を実施しました。近江八幡や守山の漁協、地域のNPO法人、有志の皆さん、住民の皆さん、シガリアンとして活動に参加してくださいました。

多種多様なシガリアンを増殖し、課題を解決することで、滋賀をもっと魅力的にできる！これからもシガリアンを増殖していきます。



ダニーさんの 秘密の湖部屋

【メンバー】

代表／山本直幸
堀 豊
吉竹 真也
不破 亨
竹平 陽
金崎 いよ子
伯耆 雅美
中畠 寧輔



まちづくり

諦めない姿は、ママたちが見せる！



日常の大津を楽しむきっかけを作ろう！と、立ち上がった「おおつながらプロジェクト」。「おおつながらプロジェクト」と言えば「あるがママfes」。と、言われるこのフェスは、ママが主体となって大津を素敵に、そして次世代に残したい、ママたちの輝く場にと企画され、家族で楽しめる体験コーナーやマルシェが人気のイベントです。このフェスを主催し、代表を務める赤阪純子さんにお話を伺いました。

まず、「おおつながらプロジェクト」、設立のきっかけをお聞きすると、「これからのおおつを話しませんか」というイベントがきっかけとのこと。このイベントで自分たちの住む大津ってどんな街だろう。と、話し合うなかで出てくるのは、デパートがない、遊べるところがない、老若男女が集まる場所がない…と、ないものばかり。それならば自分たちで作ろう！と、「おおつながらプロジェクト」が生まれ、そして「あるがママfes」へと繋がっていきます。しかし、ちょうど新型コロナウイルスによる先行きの見えない不安な時期と重なります。「コロナ禍で子どもたちの行事が次々と中止になるなか、民間の私たちだからできるんじゃないかな。何より子どもたちに諦めて欲しくないという気持ちを伝えたい。という思いが開催への大きな原動力になりました。」と、赤阪さん。初回も盛会に終え、今や5回目を数えますが、毎回出店者さんにどんな「想い」で出店するのかを必ず尋ねるそうです。お互いの「想い」を共有し、大切にする。この事が、実はフェスの人気を支えている大きな一因かもしれませんね。

さて、「おおつながらプロジェクト」は、他へのイベント参加など、活動の場を広げていますが「ゆくゆくは、パパ主体のフェスをやりたいですね！」とのこと。パパの底力をを見せたい！と、密かに思う滋賀のパパさん、ぜひ「おおつながらプロジェクト」にご一報を！

■あるがママfes第6回2023年5月28日（日）開催決定！

コミュニティづくり

実は診療所。でも寄り道したくなる、そんなところを。



一般社団法人くわくわ企画は、代表の徳田嘉仁さんが急性期病院勤務から本当にやりたい医療とはなにか。を考えはじめ、ご実家の診療所を引き継ぐことをきっかけに、仲間とともに「新しい場をつくろう」と、立ち上げた団体です。今秋には彦根市・稲枝に新しい診療所が完成予定のことですが、「新しく作る診療所は、地域の皆さんのがんばりなど、思っています。」と徳田さん。とは言え、病院に行くことは、かなり億劫なこと。「だからお茶を飲むのに寄った、買い物についてで診てもらおう。といった、気軽に『寄り道』したくなる場所にしたいと思っています。」と、新しい診療所のお話を笑顔がこぼれる徳田さん。そこには長年にわたり開業医として地域に根ざし、暮らしを支えてきた徳田さんのお父さんの姿と、離島での救命医としての経験が新しい診療所の姿を作っているようです。そこに、医療関係以外の様々な分野の方が、理事や仲間として加わり、建物こそまだありませんがマルシェなどのイベントを開催しながら理想の場づくりに試行錯誤を続けておられます。

楽しい企画はどんどん出し、楽しい仕掛けもたくさん作っています。しかし、その根底には「死を当たり前に考えてもらいたい。タブーにしないで欲しい、という思いがあります。死を受け入れることで、より人生を豊かにできますからね。」と。そして、「私の医師としての目的は、ただ命を助けるではありません。地域の皆さんの生活を支えるために命を助ける。そんな医者であります。」と、真っすぐな気持ちを伝えてくださいました。最後に徳田さんからのメッセージをお届けします！

「くわくわ」はまだ田んぼしかない土地です。今後どのような場になるのか…まだ私ですら想像がつきません！（笑）是非皆さんも一緒に“くわくわ”して頂けたら幸いです！

一般社団法人くわくわ企画

●代表／徳田嘉仁 ●設立／2020年
●<https://kuwa-kuwa.jp/>

